

(社) 東洋音楽学会関西支部 支部だより

Newsletter of the Kansai Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第40号 (2001/03/30)

♣ 定例研究会のご案内 ♣

●第203回定例研究会(卒論、修論、博論発表会)

と き: 2001年4月21日(土) 14:00~16:40

と ころ: 神戸大学発達科学部 C-101号教室

(阪急六甲駅、JR六甲道駅下車。どちらも神戸市バス36系統(鶴甲団地行き)に乗り、「神大発達科学部前」下車。)

卒業論文発表

(1) 「島を離れたウチナーンチュのエイサー～沖縄諸見里「琉鼓会」を中心事例として～」

岩田 寛子 (大阪音楽大学)

(2) 「現代に生きるわらべうたの現状と問題点～奈良市音声館の実践に基づいて～」

桑原 瑞来 (大阪音楽大学)

修士論文発表

(1) 「沖縄県宮古諸島のクイチャー～戦後の変容をめぐって～」

株本 真里 (神戸大学)

(2) 「イラン伝統音楽のラディーフを巡る「固定性」と「非固定性」」

谷 正人 (京都市立芸術大学)

博士論文発表

(1) 「民族芸能《ケチャ》について～バリ島における文化形成の視点より～」

篠田 暁子 (大阪芸術大学)

●第204回定例研究会

と き: 2001年5月26日(土) 11:00~12:00

と ころ: 国立民族学博物館 特別研究室

(民博北側通用口で「東洋音楽学会定例研究会出席」と告げて下さい。)

特別講演 「南管音楽について」

“Special lecture on *nanguan* music” (講演は英語で行われます。)

王桜芬 (WANG, Yingfen) (国立台湾大学大学院音楽研究科助教授)

同日、14:00 より民族学博物館にて同館主催の南管の演奏会が行われます。午前中の定例研究会の講演に引き続き、午後の演奏会もお聴きになりたい方には、演奏会入場整理券をご用意します。(午後の演奏会だけご希望の方は、個人で民博に直接お申し込み下さい。)

♣ 定例研究会の報告 ♣

東洋音楽学会関西支部第202回定例研究会 報告

2001年2月17日(土) 国立民族学博物館 第1演習室

研究発表

- (1) 北見真智子(神戸大学)「能楽における〈位〉をめぐって～〈場〉の理論の手がかりを求めて～」報告 藤田隆則

能楽で頻用される「位」という語の解釈を試みる研究。能には、作品ごとに固有の「位」(重さ、速さ、音色、雰囲気など)の像があると考えられており、それが適切に舞台上で演じられることが上演での目標とされる。北見氏は、そういった作品ごとの「位」が割り出される土台として、まず、能楽の世界にある「類型化の精神」に言及する。いくつかの「類型的」尺度が複合され、特定の作品の「位」が決まるということが、資料(演奏者や研究者が書いた文章)にもとづいて紹介された。

興味深かったのは、北見氏が、演奏者間で「位」の解釈に齟齬がおりうるということを紹介した点である。「位」の像は安定しているかのように語られるのが一般的だが、必ずしもそうばかりではない。この指摘に、北見氏の研究が展開するひとつの鍵があるように、評者には感じられた。

紹介された資料の中には、「位」の像のもっとも根底となる規範が「面と装束」であると指摘するものが、いくつかあった。これらは、個々の作品の音響像が、視覚的・情動的なイメージと連動しているということをしめす発言とみることができる。北見氏の論の中では、もっと集中的にあつかわれるべきことがらではなかろうか。この点にそって、今後、具体的な音響データの提示と分析がおこなわれることが期待される。

発表全体の印象。発表者自身の言葉が、研究対象をめぐり担い手らの言葉から、十分な距離を保っていない。音楽学研究者としてはとりあえず、混乱をまねく対象を「自分勝手」にわかりやすく解釈してみる「傲慢さ」あるいは「勇気」が必要なのではないだろうか。

質疑応答は、北見氏自身の研究ゴールが問いただされる場となった。目指すのは、歴史的な研究なのか、共時的な研究なのか。音楽理解なのか、音楽についての発話理解なのか。副題中の「〈場〉の理論」という言葉にこめられた夢はいったい何か。氏はまだこれらの問いに十分には答えていない。

(2) 笹原亮二 (国立民族学博物館) 「歌の意味～三匹獅子舞の歌詞をめぐって」

報告 福岡まどか

この発表は、神奈川県北部三増(みませ)の獅子舞の歌詞を例に、歌の意味について考察したものである。はじめに笹原氏は問題提起として、従来の民俗芸能研究における、歌詞の文学的意味を重視する視点に対して疑問を投げかけた。芸能の担い手たちの関心は必ずしも歌詞の文学的意味にはない。歌詞は、実際の上演の中で演技が変わるきっかけとして機能するなどの、より実践的機能をもつと認識される。その一方で、民俗芸能の担い手たちは歌詞について断片的にその意味を語るという実態もある。そこで笹原氏は、三増の獅子舞の演者たちを対象に、歌詞の意味についてのインタビューを行った。その結果の考察が今回の発表の内容である。

つづいて笹原氏は、三増の獅子舞を、次第、芸態、音楽構造などの諸点から概説した。三増の獅子舞は神奈川県北部に伝わる三匹獅子舞である。一匹の雌獅子と二匹の雄獅子が太鼓を腹に結びつけて演奏しながら、団扇をもつバンバ、天狗とともに「狂い」「ねまり」などと呼ばれるいくつかの動作の型を反復する。囃子方は笛と歌、そして獅子を演じる舞手の太鼓である。本来は 23 種の歌詞があり、これらを二種類の旋律にのせて歌うが、近年は舞台上演の機会が増えたために省略して上演している。

次に笹原氏は四人の演者へのインタビューをもとに歌の意味を巡る言説について述べた。彼らは、獅子舞の歌は、動作の回数や順番を知ったり動作の変わり目を示すものであり、舞と歌は密接な関係があるため歌の習得は非常に重要だという共通の認識を持つ一方で、歌の意味についても理解する必要があると述べ、断片的に意味について語った。

これらの語り口に共通する特徴は、詞章の一部あるいは断片に基づく部分的解釈であること、何らかの外部の情報が詞章と結びつけて語られること、詞章の内容を家庭・人生の教訓としてとらえていること、などである。これらの意味を語る人の多くは、舞手からベテランの歌師になった人たちで、特に進取の気質をもつ「群を抜く人々」であり、現役で演じることに集中している演者とは一線を画す。このような人々が詞章を対象化してその意味を理解しようとする傾向が強い。舞手から歌師(特に幹部演者)になることは、詞章を実践し「体験」するにとどまらず、それを客観視して何らかの意味を獲得するに至るために必要とされる階梯である、と笹原氏は指摘する。また、調査の結果によれば 17 世紀にはすでに書かれた歌本は存在していた。したがって民俗芸能の歴史的変化を、orality(口承) から literacy(記述) という一方向的な関係で捉えるのではなく、両者の相互関係を考察していく民俗書誌論的視点の重要性を、笹原氏は指摘した。

結論として、笹原氏は儀礼研究における福島真人氏の「喚起ポテンシャル」の視点(福島:1989)を援用し、細則の遵守としての上演に対し何らかの契機によって解釈のための反省的意識が発

生し、動員可能な民俗知識によって意味が構成されることを指摘した。

質疑応答では、演者が歌詞の意味を解釈する内在的契機と外部からの契機について、歌詞の意味を解釈する意義についての有意義な議論が交わされた。笹原氏は、民俗芸能の上演は閉じた共同体の内部にのみ限定され得ず、常に外部との関わりをもって変化してきたため、その歴史を外部との関わりの中で捉える必要性を指摘した。

(引用文献：福島真人 1983「儀礼とその釈義—形式的行動と解釈の生成」民俗芸能研究会/第一民俗芸能学会『課題としての民俗芸能研究』ひつじ書房 pp.99-154)

♣ 関西支部からのお知らせ ♣

● 関西支部定例研究会への発表申し込み方法について

関西支部では、定例研究会での会員相互の活発な活動を期待しています。研究発表等は下記の宛先にお申し込み下さい。その際、発表の種別（研究発表、資料紹介、研究演奏、調査報告など）、題目、使用機器、発表希望月、所属、氏名、連絡先を明記して下さい。

関西支部定例研究会発表申し込み先

〒656-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1 国立民族学博物館
寺田吉孝（例会・広報担当理事）研究室気付
e-mail:terada@idc.minpaku.ac.jp

● 入会申し込み方法・住所変更について

入会ご希望の方は 80 円分の郵便切手を同封し、下記の学会本部事務所へ入会案内・申し込み用紙をご請求ください。住所等の変更につきましても同事務所までお知らせください（関西支部ではお取り扱いしておりません）。

〒110-0001 台東区谷中 5-9-25 第2八光ハウス 201号
（社）東洋音楽学会
tel:03-3823-5173 fax:03-3823-5174 e-mail: LEN03210@nifty.ne.jp

（社）東洋音楽学会関西支部

〒580-0033 松原市天美南 1-108-1 阪南大学南キャンパス 櫻井研究室気付
e-mail: sakurai@hannan-u.ac.jp